

片岡良一

漱石の魅力

漱石の魅力

十九の年の二月に、私はちよつとの間死んでいたのであつたらしい。釣台で運ばれた途中の靈南坂に、雪の白く積っていたのをよく覚えていゝるし、かつぎこまれた東京病院の医者が、たぶん喀血だと思つて眉をひそめていゝる看護婦達にでもきかせたのであろう、「吐血だ、吐血だ」と大きな声でいつていたのもよく知つていゝるので、自分では決して死んだりなどしなかつたつもりなのだが、それから後電報が打たれた由で、在京の親戚などが枕元に集つて来たのが、妙に早かつたように感じられた

から、残念ながらしばらくは意識不明の状態ぐらいになつていたのであろう。しかし自分では決して意識を失うなどという不覚には陥らなかつたつもりでいたので、その後あまり大病人らしく扱われるのが面白くなかつた。物々しい顔をつき合せて何かぼそぼそ話合っている親戚や父が妙に疎ましかつた。

とにかくそういうことがあつてから間もなく、見舞に來てくれた友人が、確か春陽堂版の『鶉籠』と『虞美人草』の合本縮刷版を持って來てくれた。それが私の漱石に——というより近代文学らしいものに接した最初だつ

た。今から考えると、ていよく私を近代文学などという危険なものから遠ざからせて置こうとした、父の謀遠深慮であつたらしいのだが、中学に入つて少し物ごころづいた頃から、私は教科書以外の読書を禁じられた。「躰が弱い」だから本など読んでいてはいけない、遊べ遊べ——大きな声で英語のリーダアでも読んでいたのでないと、私はともすると父からこういういわれて机の前を追立てられた。だから私は、私どもの年配ならちようどその頃に読むのが定石だった、獨歩や蘆花などをも知らずに中学校を卒業しかけていたのである。獨歩の『武蔵野』を

自分で製本して、そつとポケットにしよばせているような学生だった友人が、そういう私にいくらかでも濡れた気もちを持たせようとして、『草枕』や『虞美人草』の御見舞となつたらしいのである。

友人のねらいは凶星に當つた。むしろ當り過ぎた。一度死んで生きかえつたばかりの私は、此の書物を読んですぐ夢中になつた。文学とはこんなに面白いものかと思つた。附添いの母などが案じるのもかまわず、二度読んだ。三度読んだ。幾度くりかえしたか覚えてもいないが、しまいには友人以外の親戚の連中などが見舞に来て、

一向取合おうともせず此本にばかり読みふけていた。見かねた看護婦が、「せつかく御見舞の方が見えたのですから」などと取なしてくれても、「いや彼等はほんとうに自分のことを心配して見舞に来てくれたのではない。ただ社交として、ないしは父への義理として、挨拶に来ているだけのものだ。だから母なり来合せている父なりが相手をしていればいいので、自分の関知したことではない」——そんな意味のことをいっては、よけい書物にかじりついて見せたりした。それで「変人」だとか「気むづかしい」とかいわれると、内心かえって得意になり

ながら、そんなことをいう相手を軽蔑したのである。「社交的な儀礼だけに生きるウソツキ」「ウソをついていながらそれが正しい生き方だと思っている俗物」——その時の私の肚の中にはそんな言葉が出来上っていた。つまり『虞美人草』などの世界に完全に捉われてしまったのである。そうしてそれがそもそものキツカケで、その時の病気からどうやら恢復した頃の私は、高等学校の文科を志望する人間になっていたのである。しかも結局の研究対象としては国文学を選ぶつもり——。

そうなるまでの過程には、『草枕』というものが強く

はたらきかけていたのであつたらしい。退院後静養のため郷里に帰らされた私は、間もなく俳諧文庫の『芭蕉全集』というものを買っている。『草枕』から俳句へ、そして結局芭蕉へ、ということになつたらしいのである。その間に、同じ合本縮刷版の『三四郎』『それから』『門』や『切抜帖』なども読んだのであつたが、『それから』などはどうもよくわからなかつたらしい。『虞美人草』張りの文章で『虞美人草』張りの感想を日記風に書いたりするかたわら、私はぐんぐん「枯寂」の世界にひかれて行つた。病後だつたからでもあろうが、そのあげくに

は例の「あなたまかせ」の思想などに傾倒することになった。芭蕉に頭からのめりこんで行く一方、相馬御風の「風人浄土」などにも親しんだ。漱石の結論「則天去私」が、わけもわからずありがたかった。そういうところから来た国文学志望だったのである。

これはむろん私というつまらぬ人間の心の歴史の一断片だが、しかしそういう歴史を閲しているだけに、漱石作品の魅力とそれの持つ危険性については、実感的に語り得る資格があるのではないかと思う。『坊っちゃん』や『虞美人草』は私の目をあけてくれた。中学生であつ

た私は、その一両年前頃から、学校や家庭に何かしらモヤモヤと不明朗なものがおおいかぶさっているのを感じて、不愉快でたまらなかった。いらいらして教師や両親につっかかかってばかりいた。そういう不快や焦燥の由来するところを、『坊つちやん』や『虞美人草』がはつきりと教えてくれたのである。その意味でそれらの作品は、私に周囲の事物をどの角度からどういう風に見るべきかを教えてくれた、ありがたいものだったのである。

が、それは、そういう見方を教えると同時に、周囲の世界を軽蔑する——少くとも人間的な正しい生き方とは

縁なきものとして投出してしまおうとするような、驕慢にしてしかも否定的絶望的な気もちを持たせずには置かなかつたのである。そこに周囲と衝突ばかりしていた当年の漱石の心境から直接来たものがあつたわけだし、その否定観や絶望感から、俳句的な、彼のいわゆる離れて眺める態度なども生れずにはいなかつたのである。そこには厳しい批評と、つき放した観照とがあるだけだつた。それはいわば厳しい人生批評家の観照で、民衆とともに生きる作家の観照ではなかつた。周囲の人々と一しよに泥にまみれるのではない、特等席からの見物人の態度だ

ったといつてもいいかも知れない。そういう見物人にならずにはいられなかった漱石の淋しさもさることながら、それがそういう特等席の見物人意識を知らず知らずの間に読者に植えつけていた点では、その時代の作品にはかなり厳しく批判されていた一面もあつたのである。その一面から来たものが、はじめて目をあけられた私の、見舞の親戚などに対して示した驕慢な態度などに、戯画的に表出されていたのである。俳句には親しんでも、芭蕉風の打砕かれた人間意識などとは全然縁のないその頃の漱石だったのである。

が、すでにいわれている通り、修善寺の大患を経て『彼岸過迄』に行つた頃から後の漱石は、もうそうした特等席におさまっている単なる批評家ではなかつた。周囲の世界が彼の外部にあるだけのものではなく、彼自身の内部にもあることを考えて、そこに苦惱を見出す人であつた。そういう意識がほんとに定着したのは『道草』だつたと思う。そこでは、描かれた人間の問題を裁く批評家的なものだけでない、それを一しよに苦しもうとする作家としての柔かく濡れた気もちが作品全体の基調となつていゝる。だからそれはもう読者に弧高を誇る自信と驕慢さを

与えるものではなく、その時代の人間が半宿命的に背負わされた問題の底深く沈潜させずにはおかない、底強い迫力を持つものになっているのである。文学がそういう迫力にまで到り得た時、はじめてほんとに熟したものになるのであることは、いうまでもあるまい。だからそこまで到り得た時、漱石自身『虞美人草』などに或る気恥しさを感ずるようになっているのである。『虞美人草』や『草枕』の作者が、そこまで歩みきった精進を尊まずにはいられぬとともに、『坊つちやん』や『虞美人草』に今もなおよき鼓舞を与えられるであろう若い世代の

人々には、少くとも此の『道草』が持つ魅力を正しく味解するところまで、漱石作品を読み進むことが必要なのだと思う。ただそこに、『坊つちやん』や『虞美人草』の持っていた積極性の失われているのが、残念なことだが――。

（二十三年一月明治文学刊
行会版『漱石全集』月報）

日本文学電子図書館

夏目漱石の作品

著 者：片岡良一

制作者：宮澤一郎

出版社：鷺の宮書店

昭和42年12月15日 印刷

昭和42年12月20日 発行

日本文学電子図書館